

舟木山洞松寺 開創600年記念法要見物記 2016. 5. 11

2016.5.11



あちこちで苗代造りが始った。
浅野さんのところに行こうと出かけると
勘ちゃんのところでは正に苗代造りの際中
浅野さんのところではもう済んでいた。
今週末が種まきか。





浅野さんのところでの用事を済ませて南に向う。山田小学校のあたりでこのまま家に戻ろうかと迷う。しかし、まあどうなるか行ってみようという気を取り直す。昨日乗本君から今日は洞松寺で10時から開創600年の大法要があると聞いた。ここ2、3日、矢掛の町中にお坊さんの姿が目につくようになっていた。で、どんな具合なのかちょっと見たくなったのだ。

しかし、ぼくは曹洞宗とは何の関係も無い。それどころか仏教とも何の関係も無い。ただ、人が精神を張りつめ、集中するところが気になる。それを野次馬的に見物してもいいものか？

迷いを置いてひたすらペダルをこぎ続け、舟木山に登る。いつもは誰もいない洞松寺の山門の前がタイヤを泥だらけにした驚くほどの数の車で埋まり、物々しい雰囲気。さすが600年。

この寺はそもそもは興福寺派の法相宗の寺だったが、1412年に喜山性讚禅師が禅宗に改宗、中興された。1441年にはお隣の備前と美作の守護赤松氏が守護に対して厳しい統制をもって対した將軍足利義教を暗殺している（嘉吉の変）。1467年には応仁の乱が起こり、戦国時代に入るといふ不安な時代である。



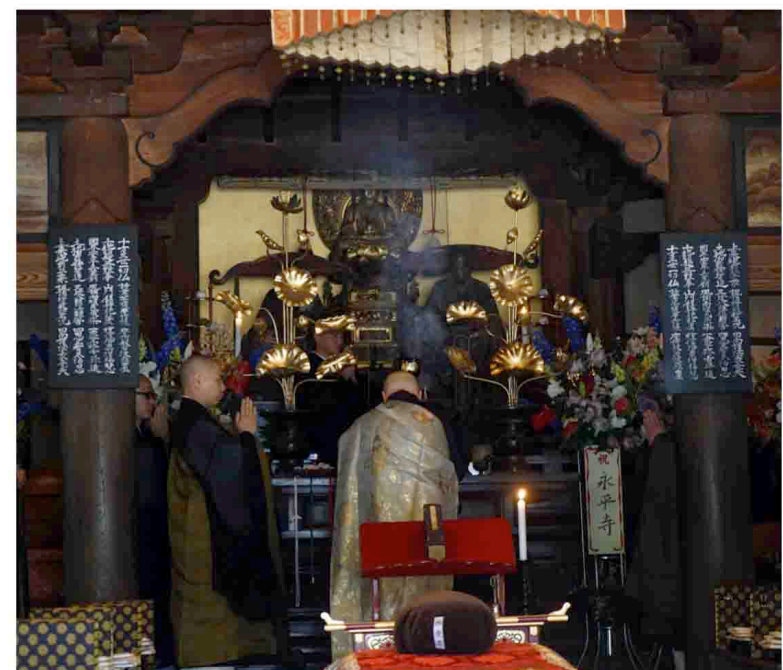
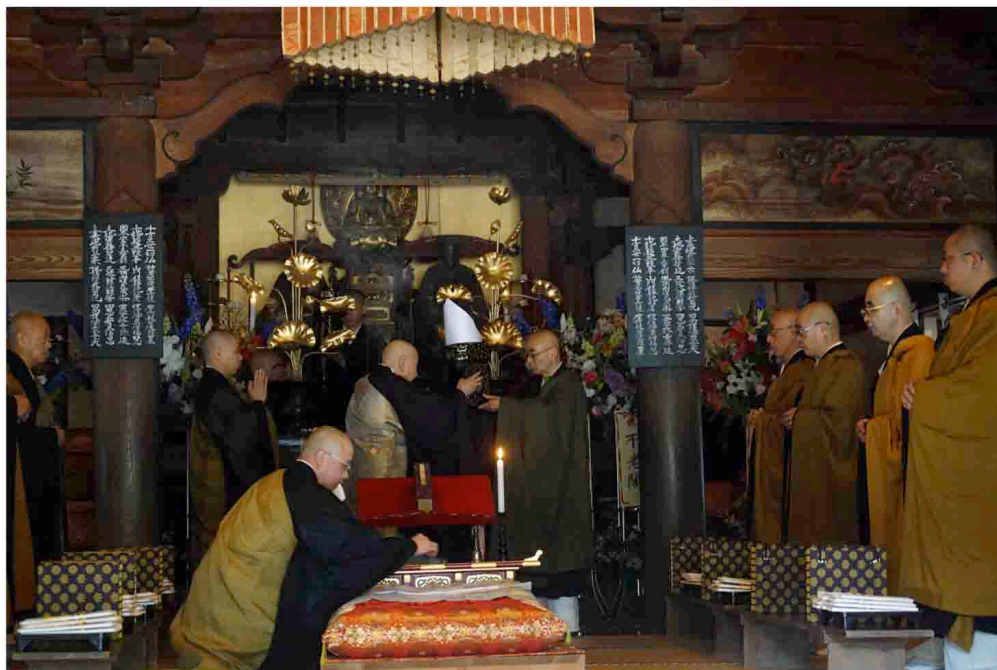
山門をくぐって境内に入る。正面本堂前には私服の人が数人。カメラバッグを持った人もいる。これならいけると判断して真っ直ぐ本堂へ。

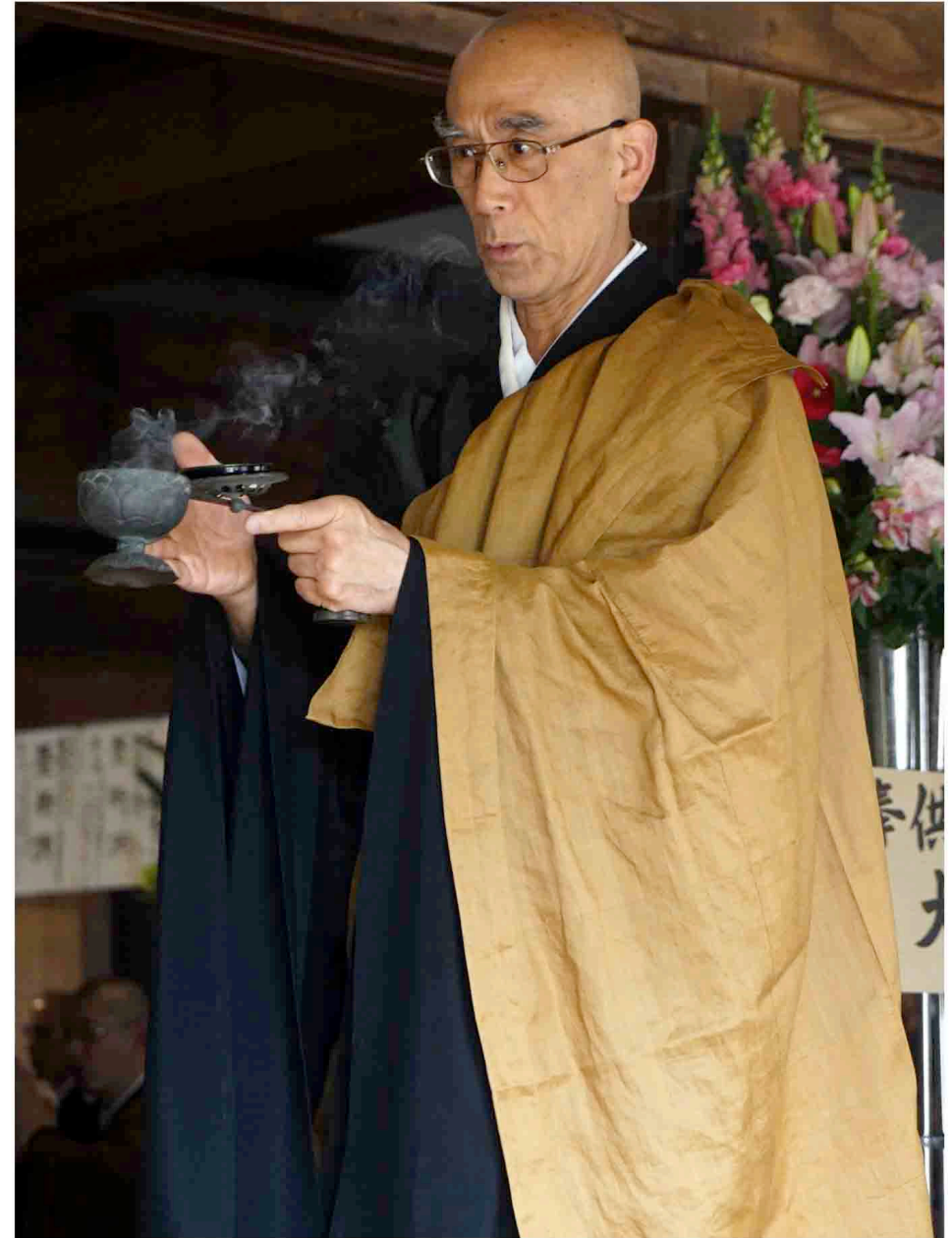
そして、暗い本堂を覗き込んで啞然とする。祭壇の左右に黄色い袈裟を着けた僧侶がずらりと並び、中央では高僧（あとで永平寺の福山貫首と知った）が祭壇に向かってしきりに礼を繰り返している。左手外れの方に顔なじみの大通寺の柴口住職が直立して合掌している。大人の厳粛な様子を見て、本能的にそれにうたれて黙り込む子供のように、ぼくも門口に直立する。

しかし、秘事とも思われる行事がこれほどあからさまに見られるとはどう言うことだろう。居並ぶ僧の背後に式服を着た檀家達が座っているがそこからこの儀式は見えない。ぼくはたちまち引き込まれ、遠慮も無くシャッターを押し始めてしまう。



行事の意味は分らない。
しかし、何かに向かってひた
すら祈り、集中する緊張感
は分る。





一連の礼が終わると右手先頭の位置にいた僧が貫首から何かを受け取り、その上で一列になって堂内を一周する。後ろについた僧は盆に乗せた花びらをつまんであちこちに放り投げる。ぼくはたった今あちら側に行こうとしている義母の為にひとひらのデンファレをつまんだ。



貫首は中央の座布団に座り、両脇の僧侶達は積み上げた教典をアコーディオンの様に猛スピードでめくり続ける大般若経転読を始める。素早く開いて閉じる黄色い教典のページから大量の言葉が堂内に溢れ出す。





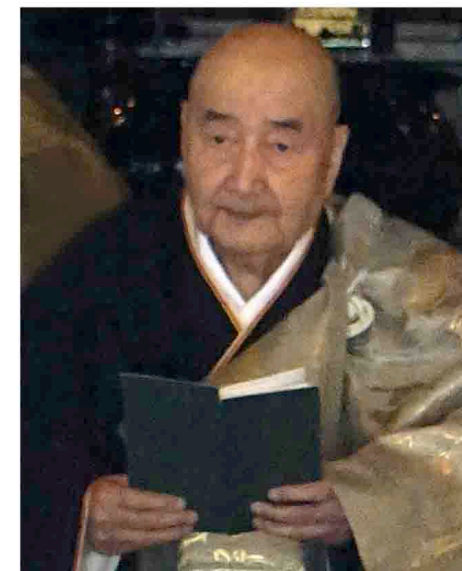
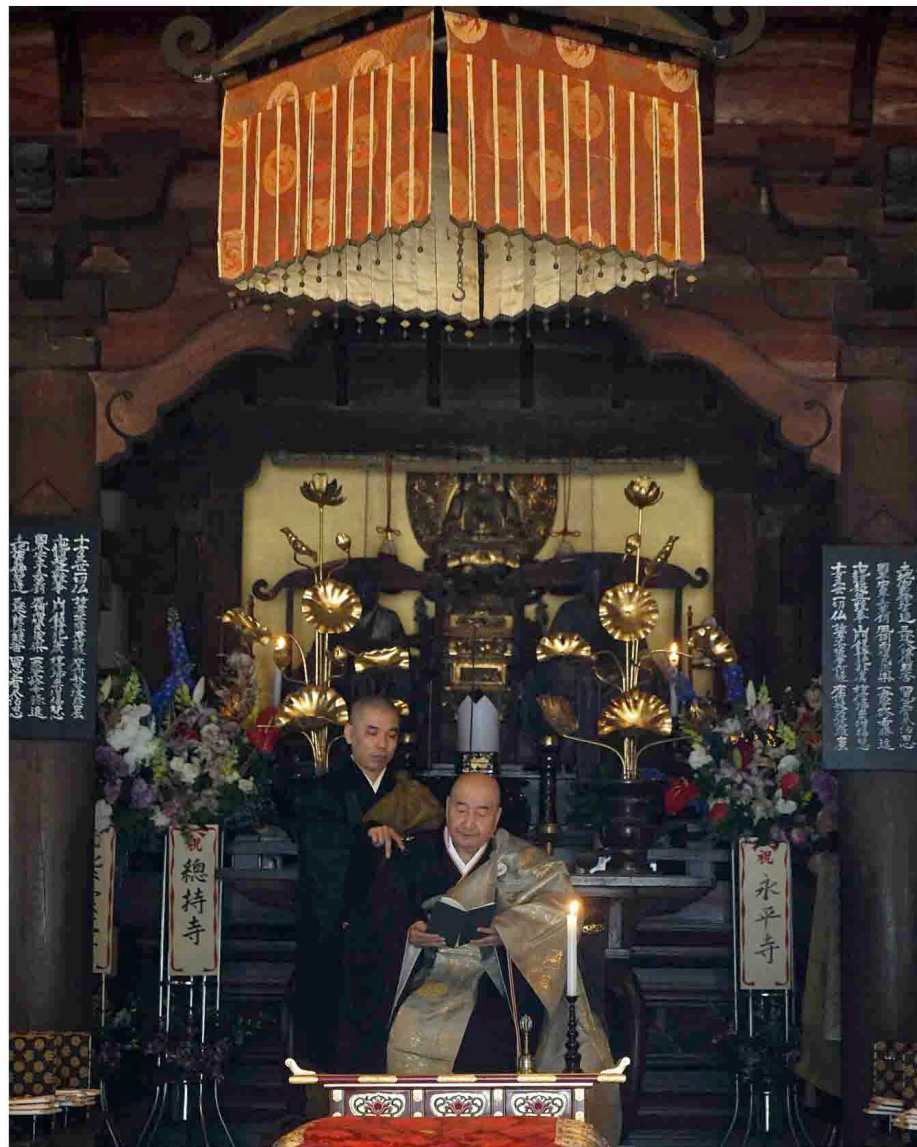
転読が終わるとお札の祈祷か？ 積み上げたお札を一枚一枚捧げて礼を繰り返す。





次いで焼香台が回される。門口にいるぼくらのところにも来てくれて、隣では足の悪いお婆さんが座ったままで焼香する。ぼくも思いもかけず焼香してしまう。図らずも義母への祈りの場をつくっていただいた。若い僧侶の笑顔がすがすがしい。





背を向いて座っていた貫首がこちらに向き直り、600年を祝う言葉を述べられる。近年専門僧堂として多くの外国人僧を受け入れていることを高く評価されていた。



10時からほぼ1時間15分。法要が終わり貫首が退出した。
柴口住職が、やや時間をおいて600年記念行事を行う旨案内される。

彼は矢掛の市街からほど近い禅寺・大通寺の住職だ。
ぼくはこれを機会に失礼する。どう言うわけか最高の特等席で法要を拝見してしまった。
宗派は違うが旅立つ義母の計らいだったと思うことにした。



帰り際、参道のすぐ下の寺田ではお婆さんが一人で田植の準備をしていた。